

# 地震などを予知する小田原の蛙石

大山正雄 \*

## 1. はじめに

要石というと茨城県の鹿島神宮の要石が有名である(板寺、1993、大林、1998)。要石は地震でもびくともせず、掘っても底知れず、大地の一番下の底、いわゆる仏教でいう金輪際に達すると考えられている。第二次大戦後、アメリカ兵が占領軍として日本に来たとき地震に遭遇し、恐怖のあまり泣き叫んだという。大地は動かないものと信じていたのであるから無理からぬことである。アメリカ人のみならず、地震になれている日本人だって地震は怖く、大地は安定していてもらいたい。

日本には地震にまつわる伝説的な話は多い。要石が地震と結びついているのは地震の多い地域の人心の安静と国家の固めとに関係している。小田原は地震の大変多い地域で、度々大きな被害を被っている。この小田原にも地震の予知もするといい伝えられている要石があるので紹介する。

## 2. 位置と由来

小田原の要石は蛙石といい、北條稻荷神社の境内にある(写真1)。住所は小田原市浜町4丁目、地元では古新宿(こしんしゅく)といっている。

小田原での東海道(国道1号線)は、これまで少なくとも4回変遷した。最初の道は海岸沿いである。次が後北條時代から江戸時代前期、そして江戸時代前期から現在までの間に2回ある。後北條時代以降は一部を除き現在の国道1号線とほぼ同じである。後北條時代から江戸初期にかけての東海道は、小田原城の方向から来るといったん南に向い、北條稻荷神社の正面にぶつかり、そして境内の周囲を西に迂回しながら再び東に行く。北條稻荷の東側には慶長一里塚が設けられていた。一里塚の付近は1955(昭和30)年頃まで松林として残っていた。江戸時代前期にあたる稲葉氏の頃、城の大手口変更によって東海道は北に付替えられた。それにもない一里塚は現在の位置に変わった。そして一里塚の所に小田原府内の東門にあたる江戸口見附が設けられ、府内への出入りをチェックした。東海道の位置が変わったことにより、北條稻荷前を通る旧経路が古新宿、新経路が新宿となった。

北條稻荷神社は北西を向いている。赤い鳥居を潜ると親子狐が両側にいる。子狐はいずれも親狐の腹下や脇でたわむれている(写真2)。親狐の形相は恐ろしく、一瞬たじろがせる。多分、子狐と稲荷の神を守っているためなのであろう。稲荷に係する動物は狐であるが、どれも威嚇的である。もとは狐でなく狼であったかも知れないとする梅原(1997)の見解は納得のいくものである。狼には大神(おおかみ)に通ずるものがある。

北條稻荷の起源は、北條氏康が1570(元亀元)年6月のある夜に霊夢を感じて創建したという。また、他の説だと、氏康は夢枕に現れた老狐のたたりで亡くなったといわれ、氏康

---

\* 神奈川県温泉地学研究所 小田原市入生田 586 〒250-0031  
報告, 神奈川県温泉地学研究所観測だより 通巻第 50 号, 79-84, 2000.

の子の氏政がこの老狐のたたりをおそれて建てたのだという。いずれにしても、北條稻荷の起源は1570年代である。祭神は倉稻魂命・大宮姫命・大巳貴命・保食命・太田命を祀り、稻荷五社明神社として崇められている(蘆田、1972)。以後、北條稻荷は後北條時代の城域東端の守りの要としての守護社となった。

なお、1951(昭和26)年11月28日に古新宿が大火に見舞われて焼け野原となった際、社殿も悉く祝融に遭ってしまった。現在の社殿は1955(昭和30)年12月に竣工したものである。

### 3. 蛙石

蛙石は北條稻荷神社の入り口の西側境内にある。姿が蛙によく似た石で、高さ43cm、縦88cm、横75cmの大きさである(写真3)。この蛙石は1590(天正18)年の豊臣秀吉の小田原攻めの時や、1703年の元禄大地震や1782年の天明大地震などの前になると、夜な夜な鳴いて、災いごとを事前に人に知らせてくれたといわれる(立木、1976)。江戸時代には遠方からわざわざ見物に来るほど小田原の名所になっていた。また案内板によると1923(大正12)年の関東大地震の時には少しも移動しなかったため、試みに掘り出そうとしたところ一丈(約3m)の深さに及んでも下部に達しなかったため、岩盤の露出の先端ではないかという。

北條稻荷神社には設立の由来以外にも、もう一つ言い伝えがある。1951(昭和26)年の火災の前夜、社殿から大きな火の玉が出たという。

このように小田原に何か異変が起きそうだと蛙石か社殿が人々に予告するようである。こうしたこともあってか、北條稻荷神社は関係者に有名で、今日でも祭礼の初午には地元の人がばかりでなく遠くから多くの人々が来るとのことである。

ところで、要石がなぜ蛙なのかである。形が似ているだけの理由ではないような気もするので、次にそれを少し考えてみたい。

### 4. 要石としての蛙の意味

世界で最初の地震計は中国で発明された。紀元132年のことである。漢の時代の張衡(78-139)が制作したもので、「候風地動儀」と呼んでいる。漢の時代の中国は隆盛を極めた。支配域が大きく広がり、学問水準も上がったので、当時の中国語は国際語となった。その様子は私たち日本人の使用している漢字が「漢の国」の文字に由来することからもうかがえる。世界で最初の地震学者ともいえる張衡の登場にはこうした社会的背景があった。

張衡の制作した候風地動儀は現存していないので正確な構造は不明であるが、1962年に発表された復元模型が北京の歴史博物館で見ることができる。模型の大きさは家庭用電気釜を二つ重ねたぐらいのようである(高見澤、1985)。なお、この復元模型の模型が箱根町立大涌谷自然科学館に地震計と共に展示されている(写真4)。

候風地動儀の仕組みは次のようなものと考えられている(尾池、1979)。大きな酒樽のような鑄物の壺の中に柱が固定せずに真っ直ぐ立っている(図1)。この柱は、振動があると倒れて、内壁に設けられている梃子を押すようになっている。壺の外壁には龍が玉をくわえていて、その下に蛙が口を大きく開いている。龍と蛙は対で八方向にある。振動で壺内の梃子が棒で押されると龍の口が開き、くわえていた玉が下にいる蛙の口の中に落ちる。その時、大きな音がして地震のあったことを知らせる。そして、玉を受取った蛙の位置から最初の振動の方向がわかるようになっている。当時の都の洛陽に置かれた候風地動儀が

西暦138年に700kmも離れた甘粛省で起きたマグニチュード6の地震を記録したという。人々は地震動を感じなかったので玉が落ちてても地震の発生を信じなかったが、数日後、震源地からの知らせが入ってはじめてこの地震計のすばらしさに感心したという。今から1800年前にすでに震央の方向を推定する原理の理解と装置の発明には驚くべきことである。今日、中国ではこの模型を地震学のシンボルマークとしている。

前書きが少し長すぎたが、ここで問題にしたいのは候風地動儀になぜ龍と蛙が登場しているのかである。中国では、龍は天子であって、地震は政治に対する天の警告であると信じていた。このことから、地動儀の龍は天の意志で、くわえている玉は天の啓示を意味していると思える。

では、蛙は何であろうか。上から落ちてくるものをしっかりと受け止めるには盤石なものでなければならない。いわゆる要石のようなものである。そして、人々に知らせる役割をしている。

この他に、「かえる」の名がつくものとして法隆寺金堂や中尊寺金色堂内陣など日本の神社建築に使用されている建築部材に蟬股(かえるまた)と言うのがある。この蟬股は二つの横材の間にさし入れた束の一種で、形が上部の加重を支えるために蛙の股のように下方に開いている。起源は中国で、おそくとも漢時代(前2世紀～後3世紀初めころ)から使われたと推測され、日本の建築には奈良時代(710～783)から現れている(村田、1981)。

## 5. おわりに

中国では、龍は動物の中では最高位に位置し、天の意志を発する役割をしている。蛙にはその天の意志をしっかりと受け止める要石的なものがあり、地上世界に伝える役割をしている。その象徴が蛙石や建築部材の蟬股となっていると考えられる。日本では蛙について、「井の中の蛙大海を知らず」とか、「蛙の面に水」とか云い、あまりよい評価をしていない。これからは蛙に敬意をはらう必要がある。

## 参考文献

- 板寺一洋(1993) なまずの頭をおさえる? 鹿島神宮(茨城県鹿島町)の要石, 温地研報告, Vol.24, No.3, 37 - 40 .
- 村田治郎(1981) かえるまた, 世界大百科事典, 第5巻, 平凡社, 214 - 217 .
- 尾池和夫(1979) 中国と地震, 東方書店, 261 .
- 大林太良(1998) 要石と大地の柱, 地震ジャーナル, 26, 44 - 50 .
- 立木望隆(1976) 小田原史跡めぐり, 名著出版, 248 .
- 高見澤薫(1985) 中国の観音様と鯰, 温地研報告, Vol.16, No.3, 97 - 100 .
- 蘆田伊人編集(1972) 新編相模国風土記稿, 第二巻, 雄山閣, 25 .
- 梅原 猛(1997) 京都発見, 新潮社, 302 .

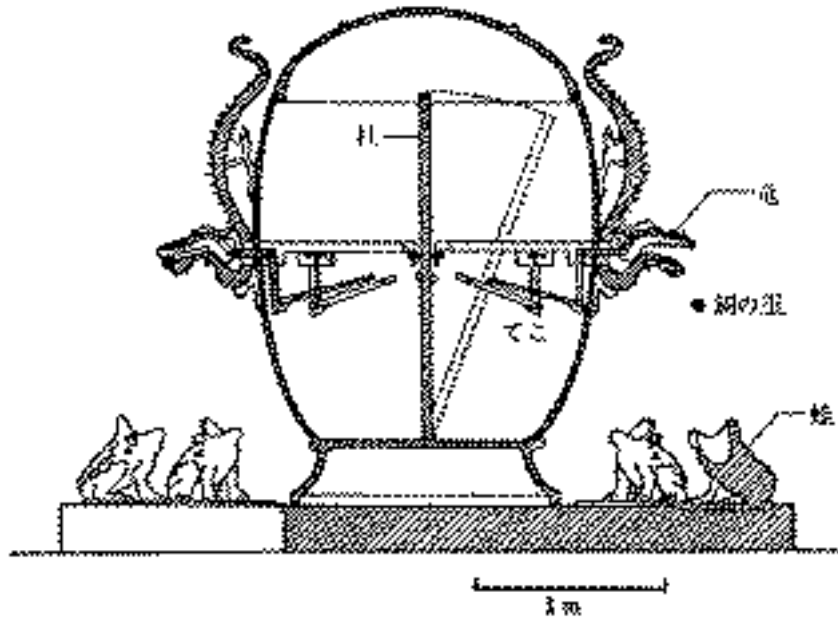


図1 張衡(78-139)の候風地動儀のしくみ(尾池、1979)



写真1 北條稻荷神社の初午(2000年2月)。右端に蛙石



写真2 稲荷社の親子狐



写真3 稲荷社の蛙石

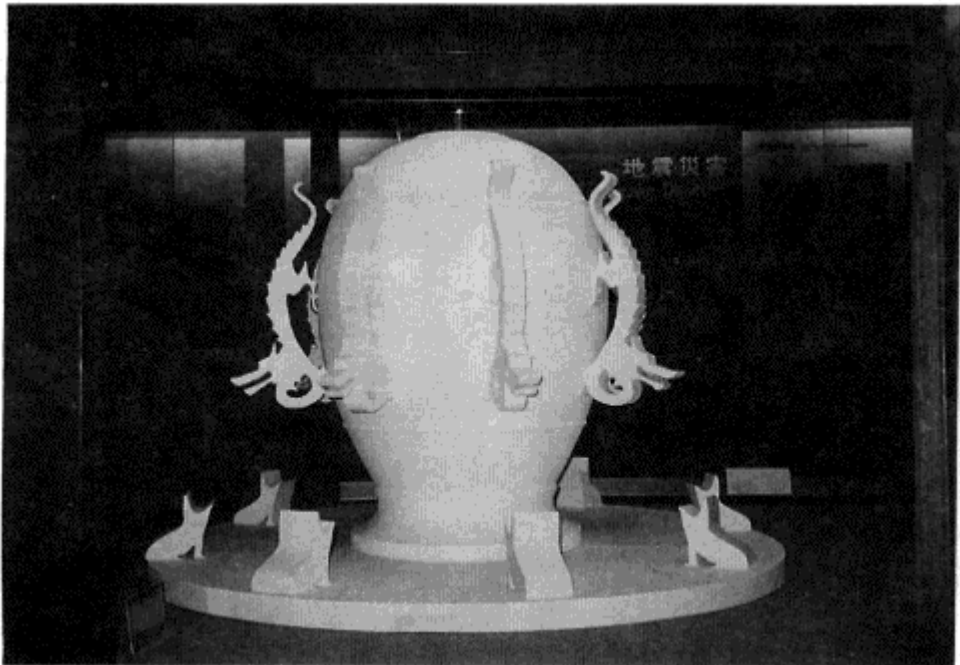


写真4 候風地動儀の復元模型(箱根町立大涌谷自然科学博物館蔵)